The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハワイ日系社会における方言接触と人称詞使用の様相：残されたオーラルヒストリーデータをもとに
Author(s)	白岩，広行；平本，美恵；朝日，祥之
Citation	阪大日本語研究. 2013, 25, p. 31-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24854
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハワイ日系社会における方言接触と人称詞使用の様相
―残されたオーラルヒストリーデータをもとに―

Dialect Contact and Use of Personal Pronouns in the Japanese Community in Hawai‘i:
A case study of the oral history records

白岩広行・平本美恵・朝日祥之
SHIRAIWA Hiroyuki・HIRAMOTO Mie・ASAHI Yoshiyuki

キーワード：ハワイ、日系人、人称詞、方言接触、オーラルヒストリーデータ

要旨

ハワイの日系社会では、明治・大正期に日本各地から移住した人々の間で激しい方言接触があったことが知られている。移住の盛んだった時期からすでに 1 世紀ほどが経過しており、その日本語変種について新たな言語データを集めるのは難しいが、本稿では、過去にオーラルヒストリーデータとして収集された資料を活用することで、その方言接触の様相を人称詞の使用状況に注目して記述した。

東北方言域出身者と中国方言域出身者を対照して分析したところ、おおよそ次のような点で、中国方言の人称詞使用の特徴が東北方言域出身者にも広まっていることが明らかになった。

(a) 東北方言域出身者であっても東北方言的なオラ・オレの使用は非常に少なく、主に標準語的なワタシ、中国方言のワシが使用される。

(b) 人称詞に接続した接尾辞ラ（例：ワシラ）の用法として、単数の対称を指し示す中国方言の用法が東北方言域出身者にも広まっている。

中国方言の特徴を東北方言域出身者が受け入れた背景には、広島・山口両県の出身者が多数を占めることや、東北方言が社会的に低く見られていたという当地の社会的背景が関わっているものと考えられる。

1. はじめに

明治期から大正期にかけて、ハワイの地には多くの日本人が移住し、日系社会を築き上げてきた。この日系社会で使われる「ハワイの日本語」については、英語の語句が頻繁に混じることとともに、広島・山口両県からの移住者が多かったため、中国地方の方言的特徴が強く見られることが知られている（比嘉 1974a; 1974b; 1976; 1985、井上 1971、神鳥 1971 など、本稿 3 節で詳述）。方言をふくめた言語接触の事例として、ハワイ日系社会の日本語変種はたいへん魅力的な研究対象と位置づけられよう。

しかしながら、移住の盛んだった明治・大正期からはすでに 1 世紀近くが経過している。第二次大戦を契機に日系人の英語社会への同化は進んでおり（野元 1973; 1974 など）、現在では日本語の使われる場面がきわめてかぎられている。特に、激しい言語（方言）接触を経験した 1 世のことばについては、新たな言語データを集めることが現実的に不可能といってよい。そこで、本稿では、過去にオーラルヒストリーデータとして収集された 1 世の語りを言語資料として活用し、ハワイの日本語変種の特徴の一端を分析することを試みる。

下に掲げるのは、1973 年から 1982 年にかけてハワイ大学の Edward Smith 氏が収集したオーラルヒストリーデータに見られる福島県出身の移住者の語りである（データについては 4 節で詳説）。

（1）ナンボ　アンタ　イナガダッテ　モノ　ユッテノ　ヒトツモ　ワガランノ　ユーノ　シャベリガダ　ステル　ドゴワ　ナイド　オモットッタノヨ　ワシラ。
（いくら、あなた、田舎でも、ものを言ってね、ひとつも分からないね、そういうね、喋り方をしているところはないと思っていたんだよ、私たちは。）

【Chôsuke（福島出身・男性）】

この発話は福島県出身者によるもので、「シャベリガダステル（喋り方をしている）」のように、カ行・タ行子音の有声化や中舌母音の使用といった点で、東北方言の音声的な特徴が表れている。一方、例中に下線で示した間投助詞のノ、否定辞のン、アスペクト形式のトル、自称詞のワシなど、語彙的・文法的な面では中国方言の特徴が表れている。これは端的な例だが、ハワイ日系社会では中国地方出身者が多数を占めており（2 節で詳説）、他地域出身者は激しい方言接触を経験したものと考えられる。

本稿では、このオーラルヒストリーのデータをもとに、特に東北方言域出身者と中国方言域出身者に注目して、ハワイ日系社会における方言接触の様相を記述する。これに先立って Hiramoto（2010）では文法面を中心とした分析、Hiramoto（in press）では音声面の分析をおこなっているが、本稿では、方言的特徴が表れやすい語彙項目として、特に人称詞に関する分析をおこなう [1)]。特に自称詞は、標準語的なワタシ、中国方言のワシやウチ、東北方言的なオラ（オレ）、英語の me など、様々なバリアントが存在し、英語をふくめたことばの接触のありかたを捉えるために適した言語項目と考える。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節で方言接触の背景としてハワイへの移住者の出身地域についてまとめ、3 節では関連の先行研究を整理する。4 節で本稿の分析対象とするオーラルヒストリーデータについて示し、5 節から具体的な分析に入る。5 節ではワタシ、ワシ、ウチ、オラ（オレ）、me などの自称詞、アンタ、オマエ、you などの対称詞に

ついて使用状況の概要をまとめ、6 節ではこれら人称詞に後接する複数形式のラに着目した分析をおこなう。その後、7 節で全体のまとめとする。

2. 移住者の出身地別に見たハワイ日系社会

本節では、ハワイ日系社会の概要について、飯田（2003）の記述を中心に、移住者（1 世）の出身地域に注目して簡単に整理する。

ハワイでは 19 世紀半ば以降、主にサトウキビ農園での労働力不足から移民が受け入れられるようになり、1868 年に初めて日本人が移住した。これが明治元年にあたったことから、このときの移住者 153 人は「元年者」と呼ばれる。このときの移民は単発的なものに終わり、その後しばらく移住は途絶えるが、政府主導の官約移民が 1885 年に開始される。移民会社による自由移民、縁故者による呼寄移民など、移住の形態は変わってゆくが、この 1885 年から「排日移民法」が制定される 1924 年までの約 40 年間にわたって多数の日本人が渡航することになる。飯田（2003:2-3）にまとめられた『海外移住統計』（海外移住事業団、1971）のデータをもとに年次ごとの移住者数を図示すると以下のようになる。

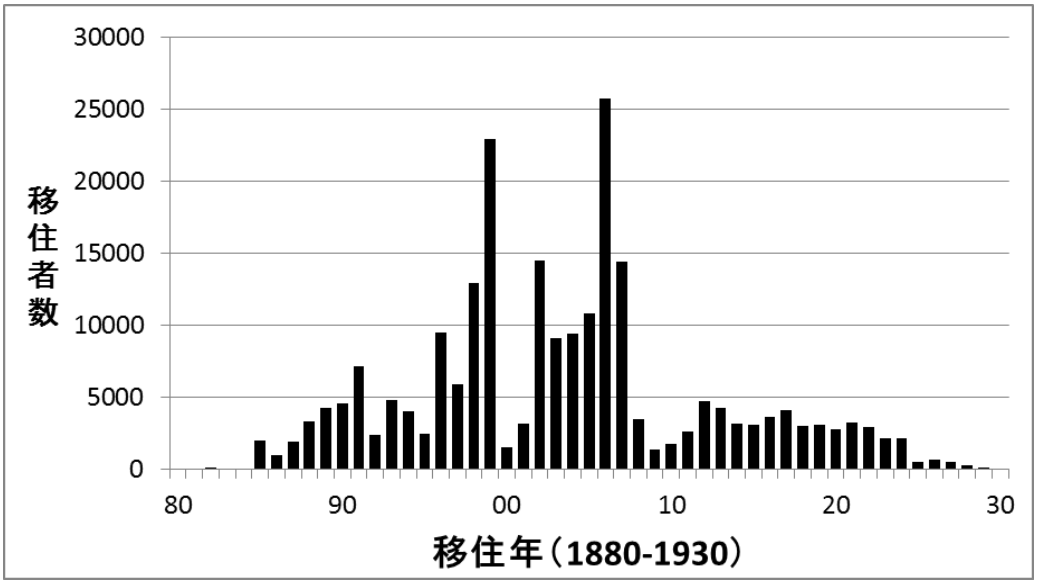

図 1　ハワイへの移住者数の推移（飯田 2003:2-3 のデータより筆者作図）

この間、日本からハワイに渡った移住者は約 20 万人におよぶが、3 割強はアメリカ本土へ再移住し、2 割弱は日本へ帰ったため、ハワイに定着した移住者は 10 万人程度とされる（飯

田 2003:18)。1924 年に「排日移民法」が制定されると、日本人の主な移住先はブラジルなどの南米に移ることになり、ハワイへの集団的な移住はおこなわれなくなる。

さて、次に彼ら移住者の出身地について示す。移民終了直後の 1929 年に刊行された『日布時事布哇年鑑』の「布哇日本人人名住所録」に掲載された移住者（1 世）の出身都道府県を飯田 (2003:35) が細かく集計している。その集計を簡略化して示したのが表 1 である。

表 1　出身都道府県別移住者数（1929 年時点。飯田 2003:35 のデータより）

都道府県	人口	
広島県	9384 人	(26.2%)
山口県	7481 人	(20.9%)
熊本県	5763 人	(16.1%)
沖縄県	4468 人	(12.5%)
福岡県	2160 人	(6.0%)
新潟県	1519 人	(4.2%)
福島県	1334 人	(3.7%)
その他東日本	1196 人	(3.3%)
その他西日本	1945 人	(5.4%)
不明	575 人	(1.6%)
計	35825 人	

本稿では長野・静岡以東を「その他東日本」、富山・岐阜・愛知以西を「その他西日本」としてまとめた。次の表 3 も同様。

表 1 では出身者の多い順に都道府県を並べたが、ここからわかるとおり、移住者の大多数は中国・九州地方出身者で占められている。特に広島県・山口県の出身者がきわだって多く、この両県だけで半数弱の人口を占める。東日本でまとまった数の移住者を出しているのは新潟県・福島県の両県だが、新潟県（1988）によると、ハワイへの移住者は新潟県内でも県北部に偏っている。

(2) なかでも新潟県での移民募集にもっとも力を入れたのは森岡商会であった。同商会が明治 31 年 12 月 9 日から、33 年 2 月 17 日までの 14 か月余りの間（筆者注 : 新潟県からの移住者が増加した時期）に、ハワイ渡航を申請した人数は 1558 名にのぼっている（外務省外交資料館所蔵「移民取扱人森岡真ニ係ル移民渡航認可一件」））。出身地がわかる者について調べると、その八割弱が北蒲原郡出身

者、二割弱が岩船郡出身者である。森岡商会の地盤がこの二郡であったことによるものであろうが、同時にこの二郡は、この時期のハワイ移住の中心地ともなった。（新潟県 1988:345）

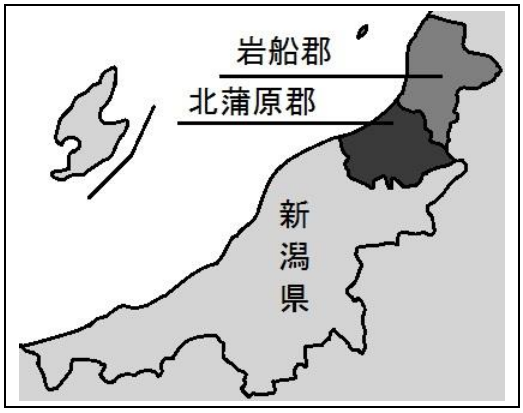

図 2　明治期の新潟県内の北蒲原郡・岩船郡の位置（筆者作図）

また、この地域は通常の方言区画では東北方言域として分類される。

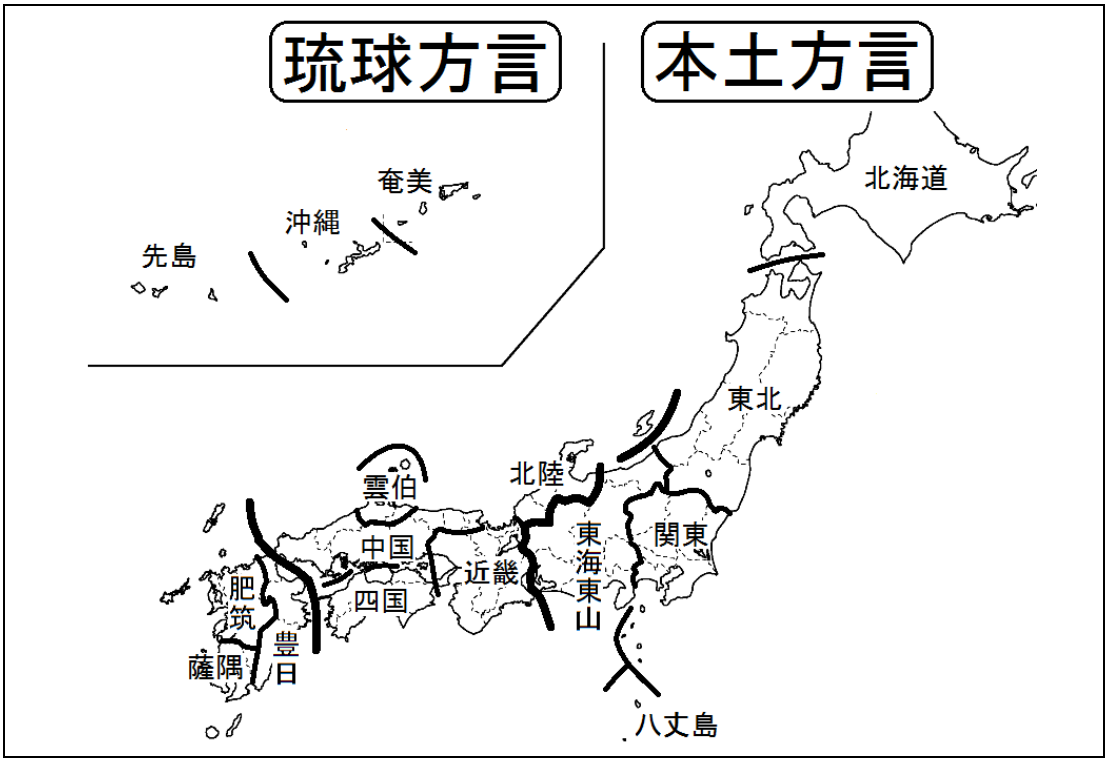

図 3　日本の方言区画（東条 1954 より筆者作図）

つまり、ハワイ日系社会の構成員を出身地別に見た場合、広島・山口の両県を中心にした中国方言話者（あるいは、これに熊本・福岡を加えた西日本方言話者）が圧倒的多数を占めるなかで、少数派の東北方言話者として新潟・福島両県の出身者が位置づけられる（また、本稿の分析には直接関係しないが、沖縄県出身者は本土出身者とは別個のコミュニティを形成していたことが知られている）。

なお、広島県・山口県出身者の割合は、移民開始当初から高かった。外務省外交史料館所蔵の「日本人民布哇国へ出稼一件（官契約）」中の史料から飯田（2003:50）がまとめたデータをもとに、移民開始当初の 1885～86 年、第 1～3 回目の官約移民で渡航した移住者の出身都道府県を以下に掲げる。

表 2　第 1～3 回官約移民の出身都道府県別移住者数（飯田 2003:50 のデータより）

都道府県	移住者数	
広島県	799 人	(36.0%)
山口県	638 人	(28.8%)
熊本県	301 人	(13.6%)
福岡県	133 人	(6.0%)
その他東日本	118 人	(5.3%)
（うち新潟県）	(32 人)	
（うち福島県）	(1 人)	
その他西日本	183 人	(8.2%)
不明	47 人	(2.1%)
計	2219 人	

沖縄県からの渡航者は 0 人。

この表に示すとおり、移民開始の時点で広島・山口両県出身者の割合は高く、この両県だけで全移住者の約 3 分の 2 を占める。一方、新潟県・福島県など東日本出身者は 1929 年のデータとして表 1 で示したよりも、さらに割合が低い。つまり、ハワイ日系社会は、その当初から広島・山口両県の出身者を中心に築き上げられてきたものであり、新潟・福島両県の東北方言話者は後発の移住者グループということができる。

以上、移住者の出身地について簡単にまとめた。ハワイへの日本人の移住は 1885 年～1924 年の間におこなわれたが、この期間を通じて多数を占めたのは広島・山口両県を中心とした西日本出身者であり、彼らを中心として当地に日系社会が築かれたものと考えられ

る。東日本でまとまった数の移住者があるのは福島県および新潟県北部の東北方言域だが、彼ら東北方言話者はハワイ日系社会では少数派かつ新参の移住者であったと考えられる。

3. 先行研究

前の 2 節では移住者の出身地域についてまとめたが、このような社会的背景から、ハワイの日本語が広島・山口両県の方言を基調にしたものになったことが多くの論者によって指摘されている。比嘉（1974a; 1974b; 1976; 1984）は次のような例を挙げて、間投助詞ノー、接続表現ケン・ケーの使用、引用表現トの省略など、広島・山口の方言的特徴が他地域出身者にも共通して見られることを示している。

(3) 今日はノー、頭が痛いケンノー、仕事を休もーー思う。
（今日は、頭が痛いから、仕事を休もうと思う）　（比嘉 1974b:180）

同様の指摘は井上（1971）や神鳥（1971）にも見られる。井上（1971）は自身が福島県出身の 1 世にインタビューしたデータとして、「母音の発音や、カ行・タ行の有声化など、福島なまりが強く残る。（中略）なお単語や語法の面では西日本の方言の影響が多く見られることにも注意（p.54）」と付記したうえで次のようなデータを掲げている。

(4) あんまり良（よ）うわがらんのよ。わしらの言（え）うごど。ほして、わしらの言（え）うごどー、生まれ東北（とうほぐ）のほうじゃがら、あんまり言葉（ことば）もベラベラ走らんからのう。
（井上 1971:54-55）

このように他地域出身者が広島・山口の方言を受け入れるようになった理由を、比嘉（1974b）は次のように説明している。

(5) ハワイ日系社会では中国地方出身者がもっとも多数であり、しかも先着者であったため、当然のように中国方言が日系人の間で共通語になっていった。（中略）少数で、しかもあとからハワイへやってきた他の地方の出身者たちは、好むと好まざるとにかかわらず、ハワイに到着後は広島・山口方言をハワイ日系社会の共通語として学ぶようになった。　（比嘉 1974b:180）

つまり、2 節で示した社会的背景から、両県の方言がハワイ日系社会の「共通語」的地位を占めるにいたったということが推察される。これは、Mufwene（2001）のいう founder principle にも合致するところであり、言語・方言の接触のありかたとして一般的な傾向の一例といえる。

ただし、これらの指摘は (3)（4）のように端的な例を挙げつつ接触状況を概説したものが多く、どのような言語項目でどのような接触の様相が見られるか、言語面からその詳細

を分析した研究はまだ多くない。

そのようななかで、具体的な言語項目に焦点をあてて分析しているのが黒川（1975; 1976）、工藤（2010）である。工藤（2010）は、『ハワイの辛抱人』（前山隆著、1986、御茶の水書房）としてまとめられた福島県出身の移住者 1 名の語りを対象にアスペクト形式の使用状況を分析し、この話者がヨル・トルによる西日本型のアスペクト体系を身につけていることを示している。また、黒川（1975; 1976）は様々な地域出身の移住者 10 名を対象に自身がインタビューし、そのデータをもとに自称詞・対称詞の使用状況を以下の表のようにまとめている（本稿での掲載にあたり、体裁を一部変更している）。

表 3　黒川（1976:95）に見る自称詞の使用状況

性	話者	出身	ワシ	ワタシ	オラ オレ	ミー	ワシ ラ	ワタ シラ	ワタシ タチ	ウチ ラ
男性	1FF	福島	7	2			5			
	3HF	広島		2				4		
	5NF	新潟	25		2		9			1
	8OF	沖縄	9				5			
	10YF	山口		14				4		
	計		41	18	2		19	8		1
女性	2FM	福島		18						
	4HM	広島	1				3			
	6NM	新潟		1	1				1	
	7KM	熊本	8	2			23	1		
	9OM	沖縄	24			6	11			
	計		33	21	1	6	37	1	1	

ワシ、ワタシ、ワシ、ワシラ、ウチラには、中舌母音によるワス、ワタス、ワス、ワスラ、ウツラの各語形を含む。

表 4　黒川（1976:95）に見る対称詞の使用状況

性	話者	出身	アナタ	アンタ	センセイサン	アンタガタ	アンタラ	アンタサン
男性	1FF	福島						
	3HF	広島						
	5NF	新潟		1		1		
	8OF	沖縄	1					
	10YF	山口			2			
	計		1	1	2	1		
女性	2FM	福島						
	4HM	広島						
	6NM	新潟						3
	7KM	熊本						
	9OM	沖縄		1			1	
	計			1			1	3

このほか間投的に使われたアンタが計 19 例見られる

黒川の調査結果として表 3 に見るように、出身地に関わらず広島・山口方言の自称詞ワシ（ワシラ）や標準語的なワタシが頻繁に使われる一方で、オレは新潟県出身者の発話に散見されるにすぎないことがわかる。また、英語の me が一部の話者に使用されている。一方、対称詞については用例数が少ないが、アンタの使用割合が高いことが指摘される。

このように、ハワイの日系社会では、多数を占める広島・山口出身者の方言が強く影響して「ハワイの日本語」が形成されたことが明らかになっているが、言語面の詳細についてはまだ記述の余地が残されている（渋谷 2010 も参照）。一方で、野元（1973; 1974）および前掲の比嘉（1974a; 1974b）、井上（1971）などが指摘するように、第二次大戦前後の日本語教育の退潮期を境として、それより後に教育を受けた世代では日本語自体が使われなくなっている。つまり、現在のハワイでは日本語の使われる場面がきわめてかぎられており、新たな言語データを収集することは難しい。日本語の方言接触について考えるうえで貴重な事例であり、まだ記述の余地が残されている一方で、すでに話し手を探すのが困難な状況になっている、というのがハワイの日本語変種をめぐる研究の現況であると思われる。

そこで、本稿では、オーラルヒストリーデータとして過去に収集されたインタビュー資

料をもとにハワイの日本語変種について言語的な分析をおこなうことを試みる[2)]。資料の概要は4節で示すが、この資料をもとに、Hiramoto（2010）では主に文法面の分析を、Hiramoto（in press）では音声面の分析をおこなっている。それに続いて、語彙項目として人称詞に着目した分析をおこなうのが本稿である。Trudgill（2004:93）が“which features speakers accomodate to in the speech of others can be accounted for by *salience*. In general it is salient features – those which are ‘noticed’(cf. Schmidt, 1990) by speakers – which are accomodated to”と述べるように、方言接触の状況下では「気づきやすい」言語項目が意識的な切り替えの影響を受けやすい。標準語的なワタシ、中国方言のワシやウチ、東北方言的なオラ（オレ）、英語の me など、様々なバリアントが存在して、話者に意識されやすく、会話中の出現頻度も多い自称詞は、方言接触の様相を見るために適した語彙項目と考えられる。自称詞や対称詞については、すでに前掲の黒川（1975; 1976）の記述があるが、これを参考にしつつ、特に東北方言域出身者と中国方言域出身者に焦点をあて、より多数のデータから自称詞・対称詞の使用状況について分析する。

4. 資料

本稿であつかうデータは、1973 年から 1982 年にかけてハワイ大学マノア校の Edward Smith 氏を中心に、当時の日本語上級クラスの学生が収集したものである。移住者がそれまでの半生を語ったものだが、調査者の学生自身が日系 3 世であることも多く、比較的カジュアルな談話が展開されている。このインタビュー時の録音データについて提供を受け、平本と白岩の両名を中心に文字化をほどこしたのが本稿であつかう資料である。

各話者に関する情報を次ページの表に掲げる。どの話者も各出身地で言語習得期（少なくとも 10 代前半までの時期）を過ごしており、サトウキビ農園の労働者およびその配偶者としてハワイに渡航している。移住の時期は 1900 年前後から移民が禁止される 1924 年までの時期で、1973～1982 年の調査時にはすでに高齢であった。また、いずれの話者も日本から来た 1 世と婚姻して長らく生活を営んできている。

これらの話者を、福島・新潟両県の東北方言域出身者 11 名、広島・山口両県の中国方言域出身者 8 名の 2 グループに分け、両グループの言語使用を比較する形で、以降の分析を進める。なお、文字化にあたっては学生アルバイト（付記参照）の助けを借りつつ、平本と白岩が中心となって整備を進めた。平本は広島県（広島市内）、白岩は福島県（主に福島市周辺）で 18 歳まで生育しており、それぞれ中国方言、東北方言のネイティブ話者としてチェックをおこなっている。

表 5　東北方言域出身の話者一覧

談話番号	録音時間	話者（仮名）	出身県	性別	会話のスタイル
2A/2B	90 分	Toraji	福島	男性	調査者によるインタビュー
7A/7B	30 分	Hisashi	福島	男性	姉妹との談話
5A/5B	60 分	Chôsuke	福島	男性	友人との談話
8B	45 分	Tsuneo	福島	男性	孫からのインタビュー（両話者は夫婦）
		Matsu	福島	女性	
9A/9B	60 分	Haru	福島	女性	調査者によるインタビュー
10A	30 分	Iku	福島	女性	調査者によるインタビュー
6A/6B	60 分	Yoshi	福島	女性	調査者によるインタビュー
1A/1B	90 分	Fuyu	福島	女性	寺の住職による グループ・インタビュー
		Ima	新潟	女性	
		Oya	福島	女性	

福島県出身者は全員が県内の伊達郡・安達郡出身。新潟県出身者は新発田市出身。

1A/1B の談話は中国方言域の話者 1 名とともに 4 名でのグループ・インタビュー

表 6　中国方言域出身の話者一覧

談話番号	録音時間	話者（仮名）	出身県	性別	会話のスタイル
20A/20B	30 分	Hatsuzo	広島	男性	調査者によるインタビュー
14A	30 分	Kenzo	山口	男性	友人との談話
17A	30 分	Tsurukichi	広島	男性	友人との談話
13A/13B	30 分	Bunta	山口	男性	兄弟での談話（両話者は兄弟）
		Teruyo	山口	女性	
1A/1B	90 分	Kayo	広島	女性	寺の住職による グループ・インタビュー
15A/15B	30 分	Sachie	広島	女性	調査者によるインタビュー
19A	20 分	Waki	山口	女性	学生によるインタビュー

1A/1B の談話は東北方言域の話者 3 名とともに 4 名でのグループ・インタビュー

5. 人称詞の使用状況

資料中の自称詞の使用状況を出身地域ごとにまとめると、表 7 のようになる。出身地に関わらず、標準語的なワタシと中国方言のワシが頻繁に使用されている。これは黒川（1976）のデータとして表 3 に掲げたのと同様の傾向だが、より多くの話者によるデータから、東北方言域出身者が本来中国方言の形式であるワシを頻繁に使っていることが明らかになった。その一方で、東北方言的な自称詞オラ・オレは、東北方言域出身者であっても、総計 255 例の例数中でたった 10 例しか見られない。

表 7　自称詞の使用状況

	ワタシ	ワシ	ウチ	オラ オレ	me	その他	計
語形の出自	標準語	中国方言	中国方言	東北方言	英語		
東北方言域出身者	130	96 （1）	0	10	18 （12）	1	255
中国方言域出身者	130	65	7	0	8	3	213

ワタシ、ワシには中舌母音によるワタス、ワスなどの語形をふくむ

ワシラなど接尾辞ラのついた語形はつかない語形にまとめてカウントしている

引用文中での出現例は、それ以外の例とは分けてカウントし、カッコ内に表示している

以下に、東北方言域出身者によるワシの使用例をいくつか掲げる。

（6）ナンボ　アンタ　イナガダッテ　モノ　ユッテノ　ヒトツモ　ワガランノ　ユーノ　シャベリガダ　ステル　ドゴワ　ナイド　オモットッタノヨ　ワシラ。
（いくら、あなた、田舎でも、ものを言ってね、ひとつも分からないね、そういうね、喋り方をしているところはないと思っていたんだよ、私たちは。）
【（1）再掲：Chôsuke（福島出身・男性）】

（7）（お金の貸し借りの話）リスマデ　ハラッテ　ワシニ　pay シタヨ。
（利子まで払って私に払ったよ。）【Hisashi（福島出身・男性）】

（8）（渡航時期について聞かれて）ワシワ　ジューハッサイデシタ。
（私は 18 歳でした）【Oya（福島出身・女性）】

(9)（ハワイに渡ってきたときの話）ソレダケンネ　ワシ　キテガラ　ンー　ワシノ　アドニ　モー　ヒトフネ　チテ、

（それだからね、私が来てから、んー、私の後にもう一船来て、）

【Ima（新潟出身・女性）】

(6)（7）では男性の使用例、(8)（9）では女性の使用例を挙げたが、ワシは性別にかかわらず用いられているようである。また、シの母音が中舌になったワスのような発音のものもみられる。

(10) コレワ　コレワ　コノヒトガ　イエバ　ホントーダロート　オモッテ　ワス　キートルヨ。

（これはこれは、この人が言えば本当だろうと思って、私は聞いてるよ。）

【Toraji（福島出身・男性）】

ワシと並行して標準語形のワタシも使われているが、同じ話者が同じ文脈でワシとワタシの両語形を使用する例も見られ、使い分けのありかたについてははっきりしない。

(11) ヘーダイニ　イッタ　boy サンガ　アノ　オナカガ　オーキクッテ　ワシモ　オナガガ　オーギグデ　ワタシモ　ハー　オナガガ　オーギーンダガラ、

（兵隊に行った男の人が、あの、お腹が大きくて、私もお腹が大きくて、私も、お腹が大きいんだから、）

【Yoshi（福島出身・女性）】

なお、同じく中国方言の自称詞でも、ウチは東北方言域出身者に受け入れられていないようである。そもそも中国方言域出身者でも使用例が少なく、この傾向は黒川（1976）のデータ（表 3）とも共通している。ワシが広く使われるようになる一方で、ウチはハワイではあまり使われることがなかったのではないかと思われる。

表 8　対称詞の使用状況

	アナタ	アンタ	オマエ	You	間投的なアンタ	計
東北方言域出身者	11	18 (3)	1 (12)	1 (2)	97	128
中国方言域出身者	18	10 (3)	1 (10)	3 (1)	19	51

アナタ、アンタにはタ行子音が有声化したアナダ、アンダなどの語形をふくむ

アンタラなど接尾辞ラのついた語形はつかない語形にまとめてカウントしている

引用文中での出現例は、それ以外の例とは分けてカウントし、カッコ内に表示している

表 8 として示すのは対称詞の使用状況である。対称詞については、方言によるバリアントの違いというより、改まり度の違いによってアナタ、アンタ、オマエといった語形が存在するが、おおよそアナタ、アンタの両語形が頻繁に使用されている。ただし、会話中で聞き手を明示的に表さないという日本語の特性からか、これら対称詞は全体の使用数自体がそう多くない。

ただし、下に挙げるような間投的な表現としてアンタが頻繁に使用されることがあった。これは文の内容に関与するものではなく、単にインタビュアーに対する呼びかけの表現であるため、表では別途に集計している。

（12）ソレガ　アンタ　サンズハンコロニ　ナッテ　マー　Saturday ワ　コンドワ　アンタ　ワシワ　センタクダ。

（それが、あなた、3 時半ころになって、まあ、土曜日は、今度は、あんた、私は洗濯だ）　【Ima（新潟出身・女性）】

ところで、出身地に関係なく、自称詞では me、対称詞では you と、英語出自の語形がある程度見られる。

（13）ホイジャケ　me ラガ　インダ　トキデモ　モー　ノ　ギンガミー　ツツンデ　freezer エ　イレトイテ　ワシニ　マツタケメシ　タイテクレテ　チョード　エー　ワシガ　ミナ　ヨバレテキタヨ。

（だから、私たちが帰ってきた（注：インダは中国方言）ときでも、もう、ね、銀紙に包んで冷蔵庫に入れておいて、私に松茸ごはんを炊いてくれて、ちょうど、えー、私が全部食べてきたよ。）　【Teruyo（山口出身・女性）】

どのような場合に me、you が用いられるか、明確な使い分けの基準はないようだが、特に白人との会話の引用部では me、you が使われやすいように見られる。以下の例を参照されたい。

（14）（サトウキビ会社を辞めたとき白人に言われたことば）「you ワ　Gay オ　ヤメタン　ドー　シタカ、　ニホン　イヌルン」テ　ユータケ、　エー　「ニホンエ　カエル」　「ホージャ。　ソレマデネ　you ワ　アノ　ジドーシャノ　salesman　セ」　ユーテ　「No　コリャー　ソー　ユー　コト　ヤッタ　コトガナイノ」「ニホンジンノ　Mr. Auya ガ　ニホンジンノ　カシラダカラ、　アレガ　オシエルカラ　セワナイケー　ヤレ。　You　ナニ　ショールカ」「イマー　me　モ　マダ　ナンニモ　セント　オル」ユータラノー。

（（白人が）「お前は Gay 社（注：会社名）を辞めたのは、どうしたことだ。日本に帰る（注：イヌルは中国方言）のか」って言ったから、「日本へ帰る」（と返

事したところ、白人が）「そうだ。それまでね、お前は、あの、自動車のセールスマンをしろ」と言って、（自分が）「いや、これは、そういうことはやったことがないね」（と返事したら）「日本人の Auya 氏が日本人の頭だから、あの人が教えるから世話はないからやれ。お前は何をしているんだ」（と言われたので、自分は）「今、私もまだ何にもしないでいる」と言ったらね。

【Kenzo（広島出身・男性）】

この例に出てくる白人は日本語のできる人物であるとは考えにくく、もともと英語でこのやりとりをおこなっていたものと考えられる。それを思い出話として日本語で語っているわけだが、引用部全体をおおむね日本語に直して語っているものの、人称詞は英語の me、you を一貫して使っている。このオーラルヒストリーデータ中でも白人との会話が引用して語られている箇所はかぎられており、この傾向を一般化することはできないが、もともと英語でおこなっていた会話を引用する場合には英語の me、you が使われやすいという可能性も考えられる。

以上、自称詞、対称詞の使用状況について述べた。自称詞については、出身地域に関わらず、標準語のワタシと中国方言形のワシが使用されている。ハワイ日系社会で多数を占めた中国方言話者の使用語形であるワシが、標準語のワタシと併用されつつ他地域出身者にも広まったものと思われる。一方、東北方言のオラ・オレ、中国方言であってもウチについては、その出身者に少数使われるにとどまっている。対称詞については、主にアナタ、アンタが使用されているが、インタビュアーに対する呼びかけとしてアンタが間投的に使われる例が非常に多いほかは、使用数が限られている。

6. ラの使用について

前の 5 節では人称詞の使用状況についてまとめたが、本節ではこれら人称詞についた接尾辞ラの使用状況について述べる。標準語や東北方言の接尾辞ラは、下の例のように、複数の意味を表すのが基本的な用法と考えられる。

（15）（大勢の家族で家を移り住んだ話）ソステ　ソレワ　エーガ、　ワタシラ　アー　ウツ　カワッタノ。　サン　サンゲン　カワリマシタ。　デ　アッチ　イッテモ　アンマリ　タクサンデ　カワルモンダカラ　「オマエラ　ウルサイケー　カワレ」　ユワレデ。

（そして、それはいいが、私たち、あー、家が変わったの。3 軒変わりました。で、あっちに行ってもあんまり（注：家族の人数が）たくさんで変わるもんだ

から「お前たち、うるさいから（注：家を）変われ」と言われて。）

【Yoshi（福島出身・女性）】

しかしながら、このオーラルヒストリーデータ中のラには、複数を表さないと解釈される例が存在する。下の例は一人でハワイに渡航したときの話や一人で仕事をしていたときの話であり、指す人物が話し手一人のことだと解釈されるが、接尾辞ラをつけてワタシラと表現されている。

（16）（一人でハワイに渡航したときの話）ソレジャカラ　アノ　ワタシラ　アノ　コチラエ　クル　トキニワ　ザ　アノ　フトン　カイマシタ　アノ　ウエエ。

（それだから、あの、私などは、あの、こちらへ来るときには、あの、布団を買いました、あの上へ。）　【Kayo（広島出身・女性）】

（17）（一人で自由に仕事をしていたときの話）ジユーナ　コド　スデ　アレダガラ、ワタシラワ　アンター　ice　アー　スゴド　イッテ　ice　クイダイ　オモッテモ　アンター　ice box ナンテ　ナイデショー。

（自由なことをして、あれだから、私などは、あんた、氷を、あー、仕事に行って氷を食べたいと思っても、あんた、アイスボックスなんてないでしょう。）

【Ima（福島出身・女性）】

このように単数の対象についたラは、本来西日本の方言に特徴的な用法で、標準語の「など」や「なんか」に近い意味を持つものと思われる。西日本方言のラの用法については上野（2001）の報告があり、高知市を中心とした地域の方言では次のように単数の対象がラで表されるという。上野（2001）は「昨日ラ」「ご飯ラ」「沖縄ラ」など種々の名詞に接続した例を挙げているが、下に自称詞に接続した例を挙げておく（上野（2001）は、標準語の「など」「なんか」に似ていつつ違いがあるとして、ラの標準語訳を＊で伏せ字にしている）。

（18）ワシラー　ホーラレル。

（冗談に）わし＊は捨てられる。

（上野（2001:81）よりアクセント記号を省いて引用）

また、『方言文法全国地図第 1 集』（国立国語研究所、1989）の「54 傘なんか（いらない）」の項目における回答語形の分布を整理したうえで、上野（2001）は「〈ra〉と〈raa〉は、紀伊半島南部から海を隔てて四国南部へ連続し、西日本の周辺部にまとまりよく分布する方言自称と受け止められる（p.79）」とまとめている。

高知方言のラと多少の異同はありうるが、筆者の平本が母方言話者として内省するかぎり、広島方言のラにも、単数の対象に接続して標準語の「など」「なんか」に近い意味を表

す用法がある。

（19）ワシラー　オキナワラー　イッタオリニャ　ヨーケー　ベーグンサン　ミタド。
（私などが沖縄あたりに行ったときには、たくさん米軍の軍人さんを見たよ。）
（平本の作例）

ほかに、人称詞に接続した例として、国立国語研究所（2004）に採録された広島市方言の例を挙げる。このワシラは話し手一人のことを指しており、談話資料の編者によって「私など」と標準語訳があてられている。

（20）イマゴロ　ホイジャケー　グラムデ　ヤルンジャケー　ワカランヨ。
近頃［は］　だから　グラムで　やるのだから　わからないよ。

ワシラーノ。　ムカシャー　アノ　イッキン　イッキン
私などはね。　昔は　あの　1斤　1斤

ナンデモ　ヤリヨッタ。
何でも　やっていた。

（国立国語研究所（2004:57）より話し相手の相槌を省いて引用。下線は筆者による）

ハワイのデータに見られるラのうち単数の対象に接続したものは、このような西日本方言の用法によるものと考えられる。一方、管見のかぎり、このようなラの用法は東北諸方言では報告されておらず、筆者の白岩が母方言話者として内省するかぎり、福島方言のラにこの用法は存在しない。それにも関わらず、（17）の例に見るとおり、東北方言域からの移住者も単数の対象にラを使用している。これは、方言接触の結果として東北方言話者が中国方言のラの用法を受け入れるようになったものと考えられる。このようなラの使用は、ほかの東北方言域出身者にも観察され、なかには me や you にラをつけた例も存在する。

（21）（一人でハワイに渡航するときの船の中で、内陸部出身のため、カツオブシのことを知らないだろうと馬鹿にされた話）「カズオブスワ　ドッカラ　ミズオノンデ　イギヲ　ストル」ッテ　「you ラ　ドッカラ　ミズ　ノンデッテ　シランダロー」　イッテ　me ラ　カマワレダンダヨ　カズオブス　カダイ　アレサカナガ　アルガ。　カツオノ　ホシダ　ヤズ。
（「カツオブシはどこから水を飲んで息をしている」って、「お前などは（注：カツオブシが）どこから水を飲んでいるってことを知らないだろう」と言って、私などはからかわれたんだよ（注：カマワレルは福島方言）。カツオブシ。硬い、あれ、魚があるじゃないか。かつおの干したもの。）【Tsuneo（福島出身・男性）】

単数の対象に接続するラの用法が本来中国方言のものであって、東北方言話者がそれを受け入れたのであろうことは、実際の使用状況からも推測される。表 9 は自称詞、対称詞にラの接続した表現を全て拾い上げ、それが単数の対象を表しているか、複数の対象を表しているかに分けてカウントしたものである。

表 9　指示対象の単数／複数とラの使用数

	自称詞		対称詞		自称詞と対称詞の総計	
	東北方言域出身者	中国方言域出身者	東北方言域出身者	中国方言域出身者	東北方言域出身者	中国方言域出身者
単数	57*	57*	6	4	63*	61*
複数	33*	2*	4	1	37*	3*

*でマークをした欄は、単複による使用例数の違いについて、両方言域の出身者間で統計的に有意な差のあることが $p<0.01$ の有意水準で確認されている

この表に示すとおり、中国方言域出身者は、ほとんど単数の対象を表す場合にラを使っている。語られたデータから正確な表現意図を解釈することは難しいが、「など」「なんか」に似た意味でラを使っているものと考えられる。一方、東北方言域出身者は対象が単数の場合でも複数の場合でもラを使っている。単数の対象に対して使われたラは中国方言話者から取り込んだ用法のラで、複数を表すラは東北方言本来のラの用法と考えられる。対称詞については例数が少ないためはっきりしたことが言えないが、自称詞、ないし自称詞と対称詞をあわせた人称詞全体の総計としては、このようなラの使用状況の差に、両方言域出身者の間で有意な差を確認することができる。

以上、本節では、方言接触の結果として中国方言（西日本方言）に特有のラの用法が東北方言域出身者にも受け入れられていることを示した。

7. まとめ

本稿では、ハワイの日系社会で起こった方言接触の様相を見る一例として、人称詞に関する事例を取り上げて分析した。ハワイの日本語変種については、すでに新たな言語資料を収集することが難しい状況となっているが、過去に記録されたオーラルヒストリーのデータを活用することで、(1) 東北方言域出身者が中国方言の自称詞ワシを使用している、(2) 東北方言域出身者が中国方言に特有のラの用法を受け入れている、といったことが明

らかになった。他地域出身者が中国方言的な要素を受け入れることでハワイの日本語変種が形成されたことは、これまでの先行研究でもうかがい知ることができるが、それら先行研究は端的な例を挙げるにとどまったものが多く、特定の言語項目に焦点をあてた分析は多くない。本稿では、語りのデータをもとにすることで、人称詞という語彙項目に関して接触状況の一端を実証することができたと考える。先行の黒川（1975; 1976）と同様の傾向を指摘しつつ、オーラルヒストリーデータの豊富な用例数から、特に東北方言域出身者の経験した言語接触のあり方について、より進んだ分析をおこなった。

ところで、話者の語りのなかには、東北方言が「隠す」べき対象のことばであったという証言が見られる。

（22）キオ　ツケルヨノ　ダイブ。　ナンボ　キオ　ツケテモ　「アー　you　フグシマケンダノ」ッテ　コー　ユワレルヨノ　ヤッパリ。　ナンボー　ソノ　ズブンノ　トコノ　ウマレダ　ケンノ　アレオ　カグソード　オモッテモ　ダメデスヨ　エー。

（気をつけるよね、だいぶ。いくら気をつけても「あー、お前は福島県だね」って、こう言われるよね、やっぱり。いくら、その、自分のところの、生まれた県の、あれを、隠そうと思っても駄目ですよ、ええ。）

【Chôsuke（福島出身・男性）】

ハワイ日系社会において東北方言が「ズーズー弁」として蔑視されていたことは、移住者の生活史についてまとめた Kimura（1988）にも指摘がある。

（23）Those who spoke non-Chûgoku-ben were not readily accepted and were often ridiculed. The Tohoku dialects of northern Honshu were reffered to by the category nickname “Zuuzuu-ben,” an onomatopoeic name for what the Tohoku dialect supposedly sound like to non-Tohoku ears – “Zuu-zuu-zuu-zuu.” (Kimura 1988:30)

東北方言に対してどのような視線が向けられていたかは別に検証する必要があるが、中国方言よりも低く見られていたのであれば、それは見過ごせない事実といっていいだろう。東北方言を隠すために中国方言の要素を取り入れたとすれば、意識的には直しにくい音声的特徴などよりも、人称詞のように「気づきやすい」語彙項目が切り替えられやすかったものと考えられる。

以上、残されたオーラルヒストリーデータをもとに、特に人称詞に焦点をあてた分析をおこなったが、このデータはハワイの日本語変種の特徴を知るために非常に有用なものである。文法面では Hiramoto（2010）、音声面では Hiramoto（in press）など、これまでも分析を進めているが、今後も様々な言語項目に注目することで、ハワイの日本語変種の言語

面の特徴を、社会的な変数をふまえながら明らかにしてゆきたい。また、ハワイの日本語変種にかぎらず、その他の海外の日本語変種、ないし失われつつある伝統方言の記述などにあたって、このようなオーラルヒストリーデータを掘り起こし、言語資料として活用することの有用性を示したいと考える。

付記

本研究は、オーラルヒストリーデータなしには成り立たないものである。データを提供してくださったハワイ大学の Edward Smith 先生には最大限の感謝を申し上げる。また、データの文字化にあたって、坂本沙織さん、田村彩香さん、福原涼子さん（以上、広島大学大学院生）、酒井雅史さん、水野恭司さん（以上、大阪大学大学院生）の協力を得た。良質とはいえない音声を相手に根気よく作業してくださった以上の各氏にも御礼申し上げる。

また、本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「接触方言学による「言語変容類型論」の構築」（プロジェクトリーダー：朝日祥之）の一環としておこなったもので、国際会議 New-Ways of Analyzing Variation Asia-Pacific 2（2012 年 8 月 4 日、於国立国語研究所）で発表した内容をもとにしている。この発表にあたっては、テクニカル面で Amelia Leong さん（シンガポール国立大学）のサポートを得ている。

本稿は連名により発表するが、データの文字化は平本と白岩が中心となって進め、用例の集計や分析、上記国際会議での発表は平本が主導した。そのうえで、今回論文の形にまとめるにあたって、白岩が執筆を担当している。朝日は上記共同研究プロジェクトのリーダーとしてそれら各段階で関わっている。

注

1）Hiramoto（2010）でも自称詞使用についての簡単な整理をおこなっている。

2）オーラルヒストリーデータをもとにした研究としては工藤（2010）も注目されるが、工藤（2010）が文字化済みで出版された資料を対象にしているのに対し、本稿であつかう資料は、インタビュー時の音声データを平本・白岩の両名が中心となって文字化したものである。

参考文献

比嘉正範（1974a）「ハワイの日本語の社会言語学的研究」『学術月報』26-11、pp.29-35

比嘉正範（1974b）「ハワイの日本語」『現代のエスプリ』85、pp.178-197

比嘉正範（1976）「日本語と日本人社会」『岩波講座日本語 1　日本語と国語学』岩波書店、pp.99-138

比嘉正範（1985）「ハワイアン・ジャパニーズ」『言語』14-11、pp.72-74

Hiramoto, Mie (2010). Dialect contact and change of the northern Japanese plantation immigrants in Hawai'i. *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25(2), 229-262.

Hiramoto, Mie (in press). Change of Tôhoku Dialect in Hawai'i. *International Journal of the Sociology of Language*

飯田耕二郎（2003）『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版

井上史雄（1971）「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』236

神鳥武彦（1971）「ハワイの日本語生活」『ことばの生態学』東京堂出版

国立国語研究所（2004）『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成　第 15 巻広島・山口』国書刊行会

工藤真由美（2010）「方言接触から見た存在動詞とアスペクト」上野善道監修『日本語研究の 12 章』明治書院、pp.71-83

黒川省三（1975）「ハワイの日本語・一世の人称代名詞使用を中心にしての一考察」『日本方言研究会第 21 回研究発表会発表原稿集』、pp.46-56

黒川省三（1976）「ハワイの日本語　――一世の人称代名詞使用を中心に」『言語』5-9、pp.91-97

Kimura, Yukiko (1988). *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Mufwene, Salikoko (2001). *The Echology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.

新潟県（1988）『新潟県史通史編 7　近代二』新潟県

野元菊雄（1973）「第Ⅳ章　日本語と日系人」林知己夫編『比較日本人論　日本とハワイの比較から』中公新書、pp.123-162

野元菊雄（1974）「ハワイ日系人の日本語能力」『計量国語学』68、pp.1-10

Schmidt, Richard W. (1990). The Role of Consciousness in Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 11, 129-158.

渋谷勝己（2010）「移民言語研究の潮流　――日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて」『待兼山論叢　文化動態論篇』44、大阪大学文学会、pp.1-23

東条操（1954）『日本方言学』吉川弘文館

Trudgill, Peter (2004). New-Dialect Formation: The Inevitability of Colonial Englishes. Edinburgh: Edinburgh University Press.

上野智子（2001）「高知県方言ラ（一）の暗示性と明治性」『日本語科学』9、pp.79-100

白岩（文学研究科助教）

平本（シンガポール国立大学 Assistant Professor）

朝日（国立国語研究所准教授・博士後期課程修了生）